

「甘え」で文学を解く

平川祐弘・鶴田欣也編

土居健郎氏が「甘えの構造」で提起した「甘え」の概念は、いまや海外でも認知され、日本人発になる数少ない独創的な概念として、普遍性が認められたと いうことになるだろう。実際、広い有効性をもつ概念であって、例えば本書に見られるのは、これを使って文学作品を読み解く試みである。面白いのは日本文学だけでなく、海外の作品にも適用され、新しい読みを可能にしていることだ。

新しい読みの面白さを示唆

甘えて
文学を解く

口テスターント圈で、聖母信仰の残るカトリック圏では比較的甘えが機能しているのではないかといい、幼児期の甘えの効用を説く。戦後の批評家が西欧の文學觀を基準に否定的な評価を下す「暗夜行路」について、鶴田欣也氏は、甘えの概念で読んでいけば明快に読み解けるとか、新しい読みの面白さと可能性を示唆する。

どの論考にもついている土居健郎氏のコメントが甘えの概念についての理解を深めてくれ、そのさら作だと評価を逆転させる。なる多面的な適用の可能性が示唆されてもいて誠に興味深い。

(新曜社・四、六三五円)

作家で、彼は甘えの二面性を非常に深く掘りきって甘えの宗教的な意味合い、ロシア的国民性までを暗示しているとか、難解で知られるカフカは従来の西欧の概念で読んでいくとわからぬところだらけだが、甘えの概念で読んでいけば明快に読み解けるとか、新しい読みの面白さと可能性を示唆する。

どの論考にもついている土居健郎氏のコメントが甘えの概念についての理解を深めてくれ、そのさら作だと評価を逆転させる。なる多面的な適用の可能性が示唆されてもいて誠に興味深い。

(新曜社・四、六三五円)